

教掌一女口

～思索の軌跡・私の長研時代～



平成 30 年 11 月

□鹿児島県総合教育センター

目次

卷頭言

「豊かな学びへの誘い」

私の長研時代

「全ては子供たちの幸せのために」「深く生きようと願う」とである。

「知的財産教育の導入」

「裏まで美しく」

「長期研修で得たもの、学んだこと」

「ムの長研時代」

「長研によつて創られた私」

「学び多き日々の中で」

「萬葉の柱と学び」



卷頭言 「豊かな学びへの誘い」

鹿児島県総合教育センター所長 池田浩一

人生に「if」があれば、とはよく耳にする言葉である。その長短はあれ、誰しもが自分の人生を振り返つた時に、「もし」あの選択をしていれば、逆にあの選択をしていなければと思える時点があるのではなかいか。たとえ、選択という大仰なものでなくとも、ある人との出会い、他者から掛けられた言葉等、後々の生き方や考え方へ影響を与える場合も多い。また、教職の身であれば、後日談として、教え子からそのことを教示され、畏れているということもあるう。現在も県内各地で現職として御活躍されている本誌掲載の皆様にとつても、当センターの長期研修という経験について、この仮定法で語れる部分があると推察している。

今年開所五十年を迎える当センターの長期研修において受け入れた研修者は、昭和四十四年五月以来、既に一、六二三人を数え、その中から本県教育を支えるリーダーを数多く輩出している。この節目の年に、過去の経験者名簿を見ると、自分自身が直接指導を受けた方々や、県内各地で御活躍される様子を見聞きした方々の名前を多数発見して認識を新たにしたところもある。今年度も十人の長期研修者が、熱心に研修に取り組んでいる。研修テーマは今日的な教育課題等多種様々であるが、前述のこととも踏まえ、彼らの今後に想いを巡らすのもセンターに勤めている者の楽しみの一つなのかもしれない。同時に、本誌に紹介されている長期研修の数々の経験に多くの先生方が興味関心を覚え、長期研修の受入れから半世紀を超える今後も、豊かな学びを重ねる先生方が続くことを心から期待してやまない。御多用な中、玉稿をお寄せくださった皆様に重ねて感謝申し上げ、未来に続く多くの教職員の学びが一層深まることを祈念して挨拶とする。

「全ては子供たちの幸せのために」

鹿児島市立広木小学校 校長 橋口 俊一



「総合教育センターで過ごしたこの六か月間、常日頃、

深めてみたいと思つていた

『道徳教育』に専念して研修

できたことは、この上ない幸

せでした。確かに、幾度とな

く挫折しそうになり、研究の難しさ、自分自身の未

熟さを痛感しましたが、私にとつては大変有意義な

経験となりました。」これは、報告書の「おわりに」

に書き記した一部です。

当時、三十歳であった私は、平成十年度前期長期研修者として、知識、経験ともに豊かな多くの先生方と出会い、教師として、人間としての在り方などを多くのことを学ぶことができました。特に、担当所員であった故長野進先生は、未熟だった私に、研究対しては厳しく的確に、悩みや苦しみには温かく指導してくださいました。道徳教育の奥深さ、すばらしさについてはもちろんのこと、人間としての

在り方、生き方についても深く学ばせていただきました。今でも、私の理想の教師像、人間像として、少しでも近付きたいという思いを抱き続けています。

さて、私は、長期研修を通して、私の教職人生を大きく変える三つのことを得ることができました。

第一は、私の教育理念が確立できたことです。それは、「自己実現」です。アメリカの心理学者であるマズローの欲求階層説によるもので、私の研究の基盤となつたものです。「人間は、本来、人間としてよりよく生きたいという夢や願いをもつてている。また、人間としての在り方や生き方を主体的に考え、夢や願いを基に、豊かな自己実現を図ろうとしているのである。いわば、自己実現の欲求を満足させることを求めて生きているのである。教育についても、子供たちが本来もつてゐる『分かるようになりたい。できるようになりたい。』などの願いを大切にし、よりよい生き方を求め、実践できるようにすること

が大切である。」この理念に立つたとき、初めて子供理解の意義が分かり、子供一人一人の思いに寄り添う教育の大切さに気付かされました。そして、それからは、子供たち一人一人の願いを大切にし、そ

れを生かした学級経営、指導を行つてきました。一つの学校を経営している今も同じです。子供たちの夢や願いを基にした教育、教職員一人一人の資質・能力に応じて、得意分野や持ち味が發揮できるような経営を推進しています。

第二は、長期研修を機に、道徳教育に長年携わることができたことです。特に、独立行政法人教員研修センター（現教職員支援機構）や県総合教育センターに勤めていた頃は、道徳の教科化に向けた取組を含めて、道徳教育の事業に携わることができました。これも、長期研修の経験があつたからこそです。

これからも、本校の子供たちの豊かな道徳性を育むことを基に、本市、本県の道徳教育の充実に寄与していきたいと思います。

第三は、「教学一如」の精神が、私の教師生活を支える根幹になつていることです。「教えることは学ぶことである。学ぶことは深く生きようと願うことである。」まさしく、学び続ける教師の在り方を示したものであり、今後、求められる教師像でもあります。長期研修後、様々な立場で、様々な職務に従事しましたが、常に、「教学一如」の精神をもち

続けてきました。もちろん本校においても同じです。

本校の教職員は、「教育のプロとしての教師集団」を目指しています。「教学一如」、学び続ける教師として、自らの資質を高めながら、子供の個性と能力を伸ばし、自己実現を図る教育を推進しています。

私の長期研修は、六ヶ月間でしたが、私の教職人生にとって、大きな転換期でした。今でも長期研修で得た三つのことを基に、教育活動に専念していくたいと思います。全ては子供たちの幸せのために…。



長期研修

平成十年度

当時所属校

鹿児島市立星峯東小学校

「深く生きようと願うことである。」

鹿児島市立伊敷中学校 校長 寺園 伸二



平成元年後期の長期研修を命ぜられた当時、私は西之表市立榕城小学校の教諭でした。一学年一学級の小規模校から再配置者として赴任してきた私にとって、

当時千人を超えていた大規模校での勤務は驚きの連続で、同僚の先輩方に圧倒的な差を見せつけられるたびに、自分がいかに力が無いかを思い知らされる毎日でした。まだ、二十代だった私は、悔しかったし、負けたくないという気持ちが強かつたのだと思います。ただただ、「授業が上手になりたい。いい先生になりたい。」という一心で様々な勉強会等に参加していました。

とのアドバイスをいただいたのです。「長期研修って何ですか。」そんな制度があることすら理解していないなかつた私でしたが、これを機会に長期研修に申し込むことになりました。森信三先生の「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎないときに。しかし、うちに求める心なくば、眼前にその人ありといえども、縁は生じず。」という言葉どおり、このときが、まさに自分の人生が変わった瞬間だったと思思います。今は人の縁の不思議に深く感謝しています。

長期研修の研究主題は「新単元『物の運動』に関する素材の教材化」としました。学習指導要領の改訂により小学校理科に「物の運動」という単元が導入され、振り子や衝突などの現象を通して、運動とエネルギーの概念形成を図ろうとするものでした。

こう言えば聞こえはいいですが、実は、教育研究を順序立てて行うこと自体が初めてなわけで、何から取りかかればいいのか分からず、指導教官の先生方に多大なご迷惑をお掛けしたことを鮮明に覚えています。しかも当時の県総合教育センターの組織は、理科だけが第一研修室と呼ばれ、ある意味独立して

いたこともあり、物理の内容だが、小学校の单元だということで、結果的に三名の第二研修室の先生方に指導を受けるという、ある意味贅沢な長期研修者になることができました。（ただし、三名から指導を受けるという厳しい状況でもありましたが…。）

朝から晩まで自作教具の開発に取り組む様子を見て、他の長研者からは、「何を遊んでいるのか」とよくからかわれたのを覚えています。同期では自分が一番若かつたし、皆とても仲がよかつたのです。

小学校以外の教員と接する機会があまりなかつた自分には、中学校、高等学校の先生方の見方や考え方には新鮮な驚きがあつて、世の中にはいろんな考え方があるのだ、いろんな考え方があつていいのだと教えられた気がします。私はその後、中学校へ転勤することになりますが、様々な出会いや経験があつたからこそ、他校種や教育行政等、新しい環境へ飛び込んでみようという勇気を持つことができたのだと思っています。長期研修の経験が、人生の様々な選択の場面で勇気を与えてくれたのです。

「教学一如」の石碑の裏には「教えることは学ぶことである。」と記されています。長期研修で学ん

だことは教育研究の仕方だったかもしれません、しかし、長期研修に行つてよかつたと思うのは、そんなことではありません。様々な人に出会い、様々な見方や考え方があるのを知り、その結果、教師には多様な見方や考え方を受入れる度量の大きさが必要だと気付いたこと、そのためには、積極的に新しい世界に飛び込んでいく勇気が必要だと心底感じることができたこと、それこそが、私の長期研修における最大の研修成果だと思っています。

「教学一如」の石碑の言葉はこう続いています。
「学ぶことは、深く生きようと願うことである。」
残り少ない教員生活を思うとき、この言葉が改めて深く心に沁みます。



長期研修

平成元年度

当時所属校

西之表市立榕城小学校

「知的財産教育の導入」

県立加治木工業高等学校 校長 満丸 浩



一 長期研修を受けるに至った経緯

振り返ると、十一年四月に私にとって大きな出来事がありました。校長室に呼ばれ、「工業科教員の九州大会で工業所有権について発表してください」と言われました。大島工業高校で電子機械科の教員として得意分野を何にしようか摸索していた時期でもあり、驚きましたが、何故、自分が「工業所有権」の発表かという疑問はすぐに解けました。その年の三月に告示された高等学校学習指導要領の工業科の教科目標に「創造的な能力を育成する」ことが示され、科目「工業技術基礎」で工業所有権を扱うことになったのです。そのため、七年間の電気メーカー勤務時代にいくつかの工業所有権を取得していくことから声を掛けていただいたようです。

翌年、加治木工業高校へ転勤となり、特許庁主催の研修会に参加することになりました。その後で、十三年から特許庁の研究指定を受け知的財産教育の実践・推進に携わることになりました。学習指導要領の改訂で新たな分野として緒に就いたばかりの「知的財産教育」でしたので、歴史的な背景や指導方法を研究したいという思いが徐々に強くなり、十五年度の長期研修に「知的財産教育の研究」で申し込みました。

二 思いが実現できた研究

国の施策では十四年に知的財産戦略大綱が決定、翌年から毎年知的財産推進計画が出されています。知識的財産教育の取り扱いが学習指導要領にも導入されました。その時期とも重なり、適時の研究テーマでした。四月からの一年間、情報教育研修室の中村室長に主指導を担当していただき、調査の仕方、データの処理、分析に至るまで多くの指導をしていただきました。そして、研究の一環として、東海大学と加治木工業高校が共催し、新築された県民交流センターで

「第一回知的財産教育セミナー」も開催しました。

翌年から公開授業を加え、セミナーは今年で十四回目を迎えていました。また、研修期間に特許庁の知的財産教育に係る教員向け指導書作成委員を兼ねていたため、長研中にもかかわらず、東京や福岡へ出張する機会が多く、御迷惑をおかけしました。研究のためならと所員の皆様には配慮をいただき、今でも感謝しています。現在も、特許庁の外郭団体の独立行政法人が主催する知的財産教育に係る研究指定校事業の統括アドバイザーの任を受け、知的財産教育の推進に携わっています。これも、一年間にわたって研究させていただいた成果によるものです。

三 仲間とともに充実した研修

この年の研修者は小・中・高・特支の各校種の二十一人でした。長期研修は研究と修養といわれますが、一年を通して基礎研修、相互研修、所外研修や英会話教室など、教員としての資質の向上を実感できるプログラムが提供されました。チームで取り組むことも多く、夢を語りながら充実した毎日でした。



長期研修

平成十五年度

当時所属校
県立加治木工業高等学校

そして、チームとしての団結のようなものが生まれ、楽しい出来事も多かつたと思います。一例を挙げると、研修者仲間でセンター内の「哲学の道」を千周散歩しようと決め、始業前や昼休みに会話を弾ませながら歩きました。机を並べていた寶満先生と達成できた際は、仲間からゴールテープで迎えられ、祝福のトロフィーまでいただきました。また、周りには桜、楓、栗、木蓮などが植えてあり、樹々の季節の移り変わりを短歌で表現し、年間報告書の裏表紙にこつそり紹介もしました。

拙作のうち三首を紹介し、当時を思い出して感謝にかえたいと思います。

梅雨雲を蹴散らし澄んだ天空に朝の散歩の心はればれ色あせてひらりと落ちる桜葉に秋の訪れ鳴く蝉寂しサクサクと踏みしめ後を振り向けば足跡続く雪の絨毯

「教師は、実践研究家」

県立指宿養護学校 校長 猿渡 努



小学校教諭として三校経験し、県立桜丘養護学校教諭として四年が経過した頃、当時の校長より「教師は、研修と研究に取り組むことが重要で、研修は、教師として社会人としての幅広い良識を持つために取り組み、研究は、自分自身の教師としての根幹を支えるために基盤となるものだ。」ということを諭されました。

その当時、実態把握に基づいて個に応じた指導に取り組んではいましたが、「本当に的確な実態把握ができ、個の特性を伸ばしていく指導が出来ているか。」という点については、自分自身の中で摸索していました。

そこで平成八年十月より六か月、当センターでの長期研修の機会をいただき、担任していた脳性麻痺児の知覚認知の研究に取り組んでいくことについたし

ました。

長期研修に取り組む直前に校長より「教師は、実践研究家だよ。」という言葉をいただき、常に実践に結びつくために理論を研究しつつ、自分の中で実践に生かしていくことが重要であり、そのための基本的な取り組みを学んできなさいと教えられました。

そこでせっかくの長期研修の機会なのでまずは、日頃、なかなか実践できない理論研究に最初の一ヶ月間取り組んでいくことにしました。対象の児童の○や□の形の認知能力を育てるために「養護・訓練」（現在の自立活動の領域）についての学習指導要領、指導文献、認知に関する各種論文、また、肢体不自由児の特性に関する文献など三十以上の資料を読み込んでいきました。

今振り返ってみてもこの時間は、非常に有意義で私の教職生活の中でも貴重な期間となりました。学校現場である程度の経験を経た後、対象児童をイメージしつつの理論研究の時間は、自分なりに理論的な内容も把握しつつ、実践に生かす視点で参考文献を一つ一つ研究していくことを覚えていきます。

そして、じっくりと理論研究に取り組んだ後、対象児の実態を様々な視点から分析し、「意欲的な活動を基に外界とのかかわりを広げる養護・訓練の研究」というテーマに絞り込み、興味・関心のあるアニメキャラクターを活用した知覚発達を促すための教具を工夫し、実践授業を分析していきました。

その際に常に児童の視線や発声、動き、教師の関わり方などの観点でビデオ分析を徹底して行っていました。この経験も長期研修ならではの貴重な経験でその後の教職生活においても児童生徒の特性を把握する視点を養えたと感謝しています。

また、当時指導していたセントラルの所員の皆様も長期研修者一人一人の計画を大切にしていただきつつ、一緒に研究課題に取り組んでくださる姿勢で指導・助言をいただき、研究の進捗状況や内容に不安を抱えつゝもじっくりと自分のテーマに取り組めたことを記憶しています。

さらに一緒に長期研修を過ごしたみんなとの意見交換や校種を超えた交流など貴重な財産となつたことは確かです。

長期研修を終えて現場に復帰し、教諭としてまた、管理職として教職に携わる中で児童生徒一人一人の個性を大切にする視点や興味・関心を生かした指導、そして何よりは、指導の根幹となる理論的な面にも自分自身少しは、意識をもつて取り組んでこれたのではないかと自負しています。

多様化する現代社会の中でたくましく生き抜く力を身につけた児童生徒を育成するために教師は、幅広い教育観や軸のぶれない指導力などを身につけていく必要があります。

この長期研修は、鹿児島の教職員にとって専門性の基盤を培う素晴らしい機会であり、私自身振り返ってみても、珠玉の期間であり、教職生活の中でも特に充実した期間であつたと感謝しています。



長期研修

平成八年度

当時所属校

県立桜丘養護学校

「裏まで美しく」

県教育庁教職員課 課長 大久保 哲志



「登校拒否の研究に行ってみ
ないか。」

長期研修という制度も知らなかつた教職生活五年目の私は、当時あまり聞いたこともなかつた「登校拒否」の研究を勧められたのです。そして、平成元年度前期生として半年間、教育センターに通いました。

長期研修で何を学んだのか。改めて思い返すと、それは、現在まで大きく影響している教員としての矜持だつたのではないかと思います。一点目は、一通り理解しているつもりでも難しい中学生にどう向き合うかということ。登校拒否の研究をする中で、思春期の反抗期のメカニズムなど改めて調べながら、自分の指導法をじっくり考え見つめ直す時間は貴重でした。二点目は、授業が上手になる方法を教わったこと。数学の研究

主事の「小手先のテクニックに走らず、良問を作りなさい。そのためには良問を解くことです。」という言葉は忘れません。それ以降、毎年の全国の公立・私立の入試問題を解くことが、私のルートーンとなっています。三点目は、毎日短時間でも汗を流すと良いということ。健康のためだけではありません。行き詰まり、先が見えなくなつたときに、アイデアがひらめくのは身体を動かしているときなのです。それは上手くいくとは限らないのですが、新たな局面を切り拓くチャンスや気力を与えてくれるものでした。

先日、新聞で、ファッショングザイナーの芦田多恵さんの文章を拝読しました。「服の良しあしは裏を見れば分かる」というのは、デザイナーの意図するデザインを具現化するのは技術者であり、その工程の良しあしは、服の裏側に出るということらしいです。迷いも無駄もない作業で服を完成させていく熟練の技術者たちは、確実にその技術を次の世代に継承してきており、彼らこそが、ブランドの宝だと、芦田氏は述べています。

我々教員も、子どもたちに對して質の高い教育を開拓できるよう、日々研鑽を積んでいます。しかし、迷いも無駄もなくという域に達するのはなかなか難しい。教育の理想を、授業という具体的な形に作り上げる職人として、教員には何が必要なのか。裏まで美しく仕上げる職人の技術をどうやって身に付けるか。一人で理想を追い求め、もがいていると目前に突如現れた大きな壁に苦悩することもあります。そんな時、長期研修は、大きな意義があると思います。

昨年、參加した長期研修者は、終了後に実際に様々な感想を述べています。人を知った、謙虚になつた、視点が広がつた、子どもの見方が変わつた、現状で満足してはいけないと考えるようになった、など。教員としての技量を上げ、問題意識を高め、意欲も新たにしていたようでした。

そもそも、教員にとって、通常の業務から離れ、仲間と共に、自らの技術を磨く修行に専念する時間は、そうそう得られない幸運です。しかも、修行の場としての教育センターには、強者の職人が

揃っています。これまで連綿と繼承されてきた熟練の技術、情報をたっぷりと持つた研究主事たちです。私は、これこそが、センター最大の魅力だと思います。学校教育に関するあらゆる分野のスペシャリストが集結した場だからこそ、教員としての技術を学び、磨き、高め、魅力ある教員へと成長することが可能となるのです。

現状に満足せず学び続ける、新たに挑戦しようとする教員でありたいと願う多くの教員が、これからも、センターを訪れるでしょう。学び続ける教員こそ鹿児島の教育を支える、学校の宝です。



長期研修

平成元年度

当時所属校

鹿児島市立明和中学校

「長期研修で得たもの、学んだこと」

県立青少年研修センター 所長 田畠 悅子



初任の頃、「よい教師になりましたから、若いうちは、広く浅く学べ。経験を積んだら、何か一つでいいから深く掘れ。」と、先輩教師によく助言されていました。十年目を過ぎた頃、児童が、よりよい生活をしようとする実践力を高めていくことをねらいとする家庭科教育に魅力を感じるようになりました。ちょうどその頃学習指導要領が改訂され、学校における環境教育や消費者教育の必要性が叫ばれ、家庭科教育の中でどのように実践していくかも課題として感じ、「じっくり掘つてみたい。」と考えるようになりました。

当時、長期研修は、高等学校籍の教員は一年間、小・中学校籍は、半年間の研修期間でした。家庭科教育については、それまで、研究公開等に出席したり、総合教育センターの短期講座を受講したりして

自分なりにやつてきたつもりではありましたがあまりでの実践を一から見直していく貴重な時間となりました。

家庭科教育の担当の佐藤真由美先生からは、消費者教育の視点から家庭科教育の指導を工夫していく研究の指導をしていただきました。指導と言つても、あくまでも研修の主体は研修者であり、テーマ設定や研究方法、研究の進め方など研修者の思いが尊重され、研究の軌道修正や調査・検討不足等への指摘・助言・指導をしてくださいました。佐藤先生は、「どうしたらいいと思うか。」「あなたはどう思うか。」「なぜそう思うか。」と根気強く問い合わせることで、私が、根拠を持つて考えを導き出すようにしてくださいました。研究は、自由度が高い分、内容や方法だけでなく、進捗状況に関する自己管理も必要でした。研究の全体像を明確にした上で、半年という期限を使って大きなスパンで研究の進め方を考えた後、やるべきことに優先順位を決めながら一つ一つ取り組んでいきます。実にシンプルなことなのですが、計画通りに進むことは少なく、自己責任の下、計画

の修正や調整をしていく必要がありました。

研究については、文献を読み比べる、関係機関の専門家の話を聞く、実験によってデータを蓄積するなど、さまざまな方法で取り組み、授業で活用する教材や体験活動を検討し、実践授業を行いました。

既存の研究を検討し、そこから何かを作り出していくため時間がかかり、思うようにいかない研究に焦りを感じ、できない自分に苛立ちを感じることもしばしばありました。また、書いては指摘されることを繰り返し、書くことは伝えることであり、読み手が正しく理解できるように、的確な言葉で適切に表現する大切さを痛感しました。だからこそ、未熟ではありますが、報告書としてまとめることができたときには、安堵感と喜びを感じたのだと思います。

研究は孤独でしたが、同じ部屋で、小・中・高等学校籍の教員と過ごし、教科指導や生徒指導等、さまざまな話題で意見交換をする機会に恵まれました。

「校種が異なると、これだけ児童生徒や家庭へのアプローチが違うのか。」と率直な感想をもちましたが、小学校卒業後も考えて指導することの大切さを

知ることとなりました。また、同じく悩みながらも、年齢や経験に関係なく、前向きにひたむきに研究に取り組む仲間の姿は、清々しく、大きな憧れとなりました。

濱里忠宜先生は著書「若き旅人たち」の中で、大村はま先生は著書「教えるということ」の中で、「研究の必要性」について述べておられます。長期研修の機会を得たことで、改めて、学ぶことの苦しみと喜びを知り、研究の意義と意味を理解することができたように思います。



長期研修
平成七年度
当時所属校
長島町立平尾小学校

「チョーケンのすゝめ」

県立博物館 館長 福永 広隆



私が、教育センターにお世話になったのはかれこれ二十年以上も前のことです。

研究テーマ

期間は一年。一年もたせるだけの研究テーマ？奄美に関するもの？できたテーマは『大島紬のシャリンバイ泥染め』。理科の授業に取り入れよう。横文字まで入ってかなり難しそうだ。中身は単なる草木染め。テーマ如何で一年の過ごし方が決まる。

研修

研修の一日はラジオ体操から始まる。そのあと、朝の会。小学校の先生が歌詞カードを配り、みんなで歌う。「負けないで もう少し 最後まで 走り抜け！」それが終わると非公式の二次会。肝心の研修は？気が付けば5時。ここからがアクティブラーニング。主体的に芝刈りに行き、中国語で対話し、思考を深める。

「え、チョーケンて何ですか？」
「教育センターでやっている長期研修よ！」
「研究ですか？（あまり興味ないんですけど）」と返す間もなく
「よかで、人を知つてくればよかたつが！行つてこい！」

発表

最初の発表は、テーマ設定の理由。教育論文も書いたことがなければ、学習指導案は略案が正式なもの

のと思つていた。今であれば、別の意味でセンターのお世話になつてゐる。口述はほとんど、小学校から來た先生が書いてくれた。

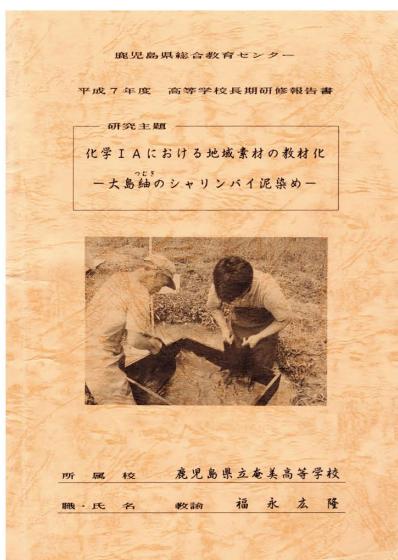
本番では大島紬を着ての発表。紬の方だけに注目が行くよう氣を遣つた。見に来られて了一般の方が「大変勇気をもらいました」と握手を求めて来られた。他人に勇気を与える発表ができたのは大島紬のおかげ?

人を知る

一緒に研修を受けた先生たちとの付き合いは今でも続いている。校種を越えて、何か困ったときにはとても頼りになる。人を知つているのと知らないのとでは大きく違う。それだけで今までの私はやつてこれたようなもの。あれから二十三年。当時、忙しい中、口述を書いてくれた先生とは、今、同じ職場で働いている。相変わらず世話になりつ放し。「人を知つちよればよかつたが!」と当時の校長の声が聞こえてくる。

チヨーケンも終わり奄美に帰ると、懐かしの先生たちが慰労会を開いてくれた。

「福永先生が一年の『長旅』から帰ってきました」



長期研修
平成七年度
当時所属校
県立奄美高等学校

「私の長研時代」

県教育庁高校教育課 指導監 福留 和宏



教員になつて二校目の鹿児島南高校の四年目だつた

平成九年度に、一年間長期研修をする機会を与えられました。「思考力・判断力を育てる『倫理』の学習指導の研究」という研究主題を設定して、「倫理」の授業において、課題解決的な学習過程を取り入れて、その過程でモニタリング

を活用すれば、生徒が主体的に思考・判断し、そのことによつて思索が深まるのではないかと予想して勉強しました。

私は、「社会」の勉強が好きで教員になりました。そんな私にとって、教員としての数年間を振り返りながら、教育という視点からものの考え方や勉強の仕方を一年間のことだけに専念しながら学べたのはとても貴重な経験でした。また、教育センターの職員の方からいただいた指導や同じ時期に研修した

小・中・特別支援・高校の先生方との交流は、今でも私の財産です。

久しぶりに報告書を開いてみると、実態調査で、「新しい学力観への対応について」や「これから求められると思う能力と倫理の授業で身に付けさせたい能力」などを調べていて、時代を感じる項目や今でも通用する項目があり懐かしく感じました。また、「表現力」が主題にないことに気付きました。それを前提にしながらも主題として焦点化していないのは、その後の研究課題として残したからかもしぬれないと考えました。

一番おもしろかったのは認知心理学の勉強で、そこから学んだ「知識」、「思考」、「判断」、「認知的モニタリング」、「認知的コントロール」などについての考え方は、私にとってとても新鮮でした。さらに勉強を進めるうちに「メタ認知」という考え方方に出会いました。授業後の生徒の感想に、「考えすぎてかえつて自分がうさまる。」というものがあり、その「うさまる自分」がまさしく「メタ認知」が働くプロセスの一部ではないかと考え、理論と実践

がつながつたと喜んだことを覚えています。この「メタ」という視点は、授業のみならず、生きていく上ですますます重要な考え方だと思います。

苦労したのは、いろいろ勉強したことを授業に落とし込む作業でした。七時間の学習計画を立てましたが、勉強の成果の「ターム」を入れ込んでいる感じが滲み出でていて、授業をする身としては実証できて満足しましたが、主体的な思考・判断を目指していたはずなのに、生徒にとつてはやらされ感があつたのではないかと思われ申し訳ない気持ちがあります。

しかしながら、メタ認知的活動を促す学習法としてまとめた、「批判的思考教授」、「一人ディベート」、「ペア問題解決」、「思考訓練」などの学習方法は、その後の授業やいろいろな仕事を進める上でとても役に立っています。

今、「学校というシステムに合ったP D C A サイクルの進め方」、「国際バカロレアの『知の理論』の手法を活かした批判的思考の育成」、「E S D の考え方を活かした課題研究の進め方」などのテーマに

興味をもつていて来年度の長研に応募したいくらいですが、貴重な機会を二回も得るのは難しいと思われますので、長研の成果を活かして自分で勉強したいと思います。



長期研修
平成九年度

当時所属校

県立鹿児島南高等学校

「長研によって創られた私」

鹿児島市立山下小学校 教諭 永田 洋一



長研室を後にして五年が経ちました。今、振り返ると「己を知る」ための過程が、長研時代に凝縮されていましたように思います。

平成二十五年四月、大原台講堂での開始式には、県内各地の小・中・高・特別支援学校から十一人の長研者が集まりました。子供たち

の読む能力を向上させたいと考えていた私は、「伝え合う力を活用して読む能力を高める国語科学習指導」を研究テーマとしました。子供たちが読み、何をどのように感じたのかを発表に伝え合う授業を行えば、読む能力の向上に結び付くのではないかと考え、長研の門を叩いたのです。

開始早々、自らの課題と向き合うことになりました。研究計画発表会の研究計画書を書き上げることが、中々できなかつたのです。わずか二枚の研究計画書を書き上げるために要した日数は十二日間。書

き直しに次ぐ書き直しの日々が続きました。長研に行く前の私は、思いだけが先走り、教育に対する認識が浅いまま教壇に立っていたのかも知れません。

テーマに掲げた「伝え合う力」を、どのように捉えているのか。「伝え合う力」をどのような方法で実践に生かしていくのか。理論から実践への過程で、どのような子供の姿を理想としているのか。御指導くださった山鹿真人研究主事の御教示によつて課題の解決が進み、研究計画書はようやく完成しました。

研究計画書を書き上げた後も、プレゼンテーションの作成や検証授業、中間発表会での報告書作成など、一つの課題を解決しようとするたびにまた新たな課題が訪れ、自らの甘さを感じながら長研者としての日々が流れていきました。しかし、同時に、それまでの知識や経験が改めて整理され、研究に対する確かな心構えが培われた日々でもありました。

「伝え合う力」を研究する上で欠かせないのは、音声言語の記録と分析でした。検証授業後に、授業の様子やペア、グループ学習の場面を記録した動画

で振り返る際、子供の言葉の一つ一つをパソコンに打ち込み、分析した内容を加筆していきました。単純な作業ですが、十分の動画であっても分析に一時間近く掛かりました。

その結果、子供の発言には必ず理由や根拠があり、

それらはほぼ全て学習課題や教師の発問、他の子供の発言とつながっていることが分かりました。また、

子供の発言の内容を捉えてみると、「その言葉は、どうして表現されたのか」という目的意識や、その言葉は、誰に対して発せられているのかという相手意識、その言葉は、どのような文脈や状況で生じたのかといった状況意識。さらに、子供自身や他の子供はどういう評価しているのかという評価意識など、子供の言葉には常にその子供の意識が表出していました。

それまで、「伝え合う力」が課題解決にどのように作用しているか、考えたことはありませんでした。そんな私にとって、音声言語の記録と分析は、新たな発見の連続でした。同時に、言語の教育を担う国語科の長研者としての未熟さや、国語を教える

責任の重さを実感する体験でもありました。

現在、授業を行う際には、発問や学習課題に対してどのような子供の考え方や思いがあるかを想定し、丁寧に子供の言葉を取り上げたり、問い合わせや価値付けの声掛けをしたりすることで、よりよい課題解決へ導こうと努力しています。

長研時代を顧みると、自分の中にある様々な弱さや甘さと向き合い、自分がどのような教師になりたいのかを明確にすることのできた一年間でした。これからも、これまでと同様に「己を知る」道を大切にしながら歩み続けたいと思っています。



長期研修

平成二十五年度

鹿児島市立春山小学校
当時所属校

「学び多き日々の中で」

南種子町立南種子中学校 教諭 山端 真規子



今から七年前。私に転機がやってきました。数学教諭として採用されて以来ずっと思っていたこと、それは、「本格的に数学教育の勉強をし、教師としての力量を高めたい」ということでした。今まで勤務してきた学校でも、経験豊富な素晴らしい先生方の実践に刺激を受けてきてはいたものの、数学教育にきちんと向き合い本質を深く学ぶ努力をするまでには至つていませんでした。しかし、そんな自分に「長期研修」という機会がめぐつてきました。

研修初日、一年間共に学び合う同期の仲間十一名と共に所員の皆様の歓迎を受けました。田淵所長のお話を聞き、長研生としての自覚と責任を感じ、これから日々に期待が高まりました。こうしてスタートした長研での日々は、悩んだり頭が痛くなるほどに一つのことを深く考えたりすることの連続でした。考えすぎて眠れないことや、

できない自分が悔しくて涙が止まらなかつたことも沢山ありました。しかし、どんなときでも、一緒に考え、相談にのつてくださる担当していただいた研究主事をはじめとし、チーム員の研究同事の皆様の存在は、ありがたく心強いものでした。また、研究に行き詰まつたとき、一緒に励まし合い意見を出し合つた長研者の仲間の存在はかけがえのないものでした。このように、一つのことを深く長い時間、考え方抜き追究した経験は、私にとって二度とないくらい貴重な時間であり、大きな自信につながりました。

担当していただいた研究主事は、大変勉強熱心な方で、驚いたことにどんな質問にも必ず答えてくださいました。「答えられない質問がないのではないか」と思うほど、専門性に富み、小中高すべての分野を網羅されており、私の稚拙な質問にも理解できるまで丁寧に、そして根気強く教えていただきました。研究に行き詰まり方向性がわからなくなつてしまつたとき、研究主事に話をすることで不思議と何をすべきか道筋がみえてくるような気がしたものでした。この一年間で、折り目一つなくピカピカだった中学校学習指導要領

解説数学編がボロボロになるくらい、何度も何度も読み返しの内容を理解しようと努めました。また、数学の研究だけでなく、年間通して計画的に行われた多種多様な研修内容のおかげで、教師としての姿勢を見つめ直す機会となり知識・教養を身につけ、視野を広げることができました。思い出は尽きませんが、最後に沢山の学びと思い出あふれる一年間の中で、私にとつての「一番」を三点述べたいと思います。

まず、一番多く通った場所は、閲覧室でした。沢山の専門書や研究文献などの貴重な資料があり、勉強不足の私は、時間を見つけては閲覧室に行き、文献や専門書を読みあさりました。最初は、書かれてある内容が理解できず、学べば学ぶほど学ばなければならぬことが湧いてくるため、閲覧室通いがとまらない日々でした。

次に、一番好きな時間は、所員の皆様が朝の会でしてくださる所員講話の時間でした。毎日交代で、バラエティーに富んだお話をいただき、所員の皆様を身近に感じるとともに元気をいただくひとときでもありました。

最後に、一番楽しみだった時間は、週一回一時

間あるイングリッシュアワーでした。この時間は、一切日本語が使えず、ALTの方と英語を通して文化を学ぶ時間でした。ALTの方から質問され指名される度に、青くなったり赤くなったりする互いの姿に笑いが絶えない時間となり、授業中に指名される生徒の気持ちが痛いほど身にしました。

学んだことは多くあり、まだまだ還元できずにいる毎日ですが、生徒と共に生き生きとした学びの時間をつくっていける教師を目指にこれからも努力していきたいと思います。



長期研修

平成二十四年度

当時所属校

鹿児島市立紫原中学校

「萬葉の杜と学び」

県立開陽高等学校 教諭 近藤 美希



センターでの一年間、私は休まず昼食時間に走った。

萬葉の杜では、草花と対話した。哲学の道では自己と対峙したり、走ることで、身体とも向き合つたりした。

仕事と育児に追われ、現場での休み時間は、生徒との貴重な時間であつた私にとって、その十五分間は、至福の瞬間だった。

中野健作所長は、中学時代の恩師であり、潑刺と話される一語一語の重みは、思春期に感じたものと寸分違わぬ貴重なものであつた。正月に舞つた雪を踏みしめ、センターの一室で鎌田政司研究主事のご指導を受けていたところ、中野所長は雪のセンターを見にいらした。教學一如の精神を学んだ元日だ。その中野所長からのお言葉で「子供たちが、今、苦しい思いをしても、より豊かな（価値ある）世界を

自分の中にもつことができるようにならねば」とあつたのが、今でも私の道標となつていています。また、チームの先生方からのあらゆる視点からの御指摘も、その年の手帳にびつしり記されている。そして、長研同期の仲間とは今でもつながりをもつ。毎年、長研発表会の夜、一年の軌跡を確認し、深く語り合う。

私たちの職務は、目の前の生徒たちに、価値ある未来のために、今を健気に生き抜くことだと指標を見る

ことだと思う。私は、国語教師であるので、毎年、大学入試問題を紐解く。今年度の印象深い素材文は、現代文の問題で、西行の生き方に書いて書かれたものだ。西行の歌道に対する姿勢は、歌よりも、この世に真実に生きることだったという。その言葉の中に「仕事を立派に果たすのは、まず自分のためなのだ。自分の姿勢を正し、深く息をするのと同じだ。」とある。この世の好さを全身で生きるとは、こちらの身が歪んでいては叶わないのである。

いい歌を作るには、まず深く豊かに生きなければならぬと全身で弟子に語っている。西行は、日常生活を真面目に生きる中で、自分の本望を叶えていく

必要性を説く。まさに、「地に足の着いた」行動が必要ということだ。しかし、自分を取り巻く環境は、自分が選択できるものとできないものがあることも周知の事実だ。今の自分の環境の中でできることを積み重ね、自分の生きよい環境に身を置けるように学び続けなければならない。それが生きる力であり、より豊かに生きる術だと改めて考える。

学習指導要領の根底は、これまでの先人たちの積み上げてきたものを、言葉として表出し、実践への導きを意図したものだと考える。そして、その具現化は、教師の生き様や自身の深い学びと絡み合い、功を奏すものだと思う。教師と巡り会い、そして、その個性を子供たちが学びとすることで、自己形成と環境創造につながると考える。

生徒ができないことを叱り、夜そのことを考えて落ち込んでも、次の朝、またその子が何とか考えたことを伝えにきてくれる。そういう日常の出来事、三歩進んで、二歩下がるような日々。その中で、教師である私たちには生徒に生かされてもいる。

今私の夢は、開陽高校の校訓「夢・実現」を、何

らかの挫折を経験した生徒たちに、具現化したいということだ。「・」の意味は大きい。夢の実現には糾余曲折があり、軌道修正が必要な場合の方が多い。道を探ることが大切で、しなやかに強い精神力が不可欠だ。そして、人生の失敗を糧にするために、深く学ぶ場にしたい。

人間は、自己の存在を豊かにするために、種々の対話を試みる。学習指導要領を読み解き、形作るポイントは、常に私たちの現前にあることを教えてくれたセンターでの日々。萬葉の杜は、過去を偲び、現在を語らい、未来への対話の輪を広げてくれる。今でも年に数回、息子たちと散策する。四季の移ろいに身を投影し、自然と同体となり、「ますらをぶり」に嘆息しながら。



長期研修

平成二十三年度

当時所属校

県立指宿高等学校

「長期研修で得た宝」

鹿児島大学教育学部附属

特別支援学校 教諭 村岡 綾



平成二十二年度鹿児島県総合教育センター長期研修で自分が得た宝は、様々な視点で教育について考えたこと、専門性を高めたこと、他校種の仲間とつながりをもてたことです。

様々な視点で教育について考えたこととして最も記憶に残っているのは、教育の不易と流行という視点です。常に不易と流行を見極めながら教育を進めていくことが重要であることについて助言をいただき、その言葉を念頭に一年間の研修を進めました。特別支援学校の子供たちにとって、「自立活動」が大変重要な指導領域であり、それを生活に生かしていくことが、私たち教師の最大の努め・・・長期研修報告書のあとがきに、自分が「長期研修の始まり」と記している言葉です。七年が経った今、平成二十

五年九月に学校教育法施行令の一部が改正されて就学基準が改正されたり、平成二十八年四月に障害者差別解消法が施行されてインクルーシブ教育システムの構築が喫緊の課題となったりと、特別支援教育を取り巻く環境も大きく変わっていきます。しかし、特別支援学校の子供たちにとって、「自立活動」が大変重要な指導領域であることは変わらず、変わらないどころか、平成二十九年三月に改訂された小・中学校の学習指導要領において、特別支援学級や通級の指導における「自立活動」の在り方が明記され、特別支援学校の子供たちだけでなく、小・中学校の子供たちにとっても重要な指導領域にもなっています。時代を越えて変わらない価値がある「自立活動」という指導領域と、時代の変化と共に変わっていく必要がある「自立活動」の指導対象に応じた指導内容をこれからも的確に捉えながら教育を進めていくと強く思います。

長期研修では、集中力や落ち着きといった自己コントロール力に関する課題のある対象児への「動きの学習」の指導を通して、自立活動を生活に生かす

ための指導の在り方について研究をしました。現在、特別支援学校におけるセンター的機能として、小・中学校や幼稚園、保育所の巡回相談等を行う支援部の役割を担っています。巡回相談の中では、集中することが難しい、落ち着きがないといった主訴が、多く挙がってきます。そこで、長期研修において、動きの学習と情緒の安定の関係について研究したことを基に、行動の理解の仕方や支援の在り方について伝えることができるところも多いです。これからも、長期研修で高めた専門性を生かして、特別支援学校だけでなく、現在、強く求められるようになつた他校種における特別支援教育の充実にも貢献することができるようにしたいです。

また、長期研修で一年間共に過ごした他校種の仲間とのつながりも私にとって大きな宝となりました。研修中は、他校種の仲間が、それぞれの研究教科について言葉の一語一語にこだわりながら研究したこと聞き、意見交換をすることで、各教科の知識を深めることができました。共に研修した仲間は、県内各地の学校で活躍していますが、今でも連絡を取

り合う仲間となっています。各教科について知りたいことがあれば、すぐに情報を得ることができることは大きな財産になっています。そして、特別支援教育を進めていくためには、横のつながりも大変重要です。一人一人の子供を取り巻く環境が広がることで、より充実した支援につなげることができます。鹿児島県の特別支援教育の充実につなげるためにも、横のつながりを生かして、支援の輪を広げていけるようにしたいです。

自分が長期研修で得た宝を子供たちに還元することができるように、これからも研修を重ねながら実践していくたいです。



長期研修
平成二十二年度
当時所属校
県立串木野養護学校

長期研修ってどんな研修？

県総合教育センターにおいて1年間を通して研究主題に取り組むとともに、教育全般について様々な研修等を受講し、教員としての資質を高め、鹿児島県の教育施策を遂行する実践力を身に付け、学校現場において即戦力となる教員を目指します。

～長期研修者の声から～

環境・設備

- 緑に囲まれた環境で四季を感じながら研究に取り組むことで、感性を磨き、豊かで創造的な発想力を育むことができます。
- 空調や充実したICT機器など快適に研究を進められる環境が整っています。



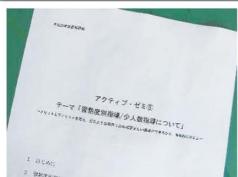
English Hour

毎週1回のALTとの交流を通して楽しく英会話スキルを身に付けられます。



基礎研修

今日の教育課題等についての講義やワークショップ、ディスカッション等を通して授業改善や研究の深化に資することができます。また、自らの生き方や教育者としての在り方について見つめ直すことができます。



短期研修・研究公開

- 教育センターで実施される短期研修講座に自由に参加できます。
- 研究校や提携校の研究公開に何度でも参加できます。



素敵な出会い

- 教育センターの研究主事をはじめ、教職大学院生や校種の異なる研修者との交流を通して、自分の研究だけではなく幅広い視点や考え方を身に付けることができます。新たな世界の広がりを実感できます。
- 多くの刺激的で多様な出会いがあり、学校では経験できない様々な学びに満ちあふれています。毎日がドキドキワクワクです！



研究支援

- 各教科等のプロフェッショナルにいつでも質問や相談をすることができます。
- 担当の研究主事から研究に関する専門的知識・技能についてマンツーマンで指導助言を受けることができます。



長期研修の様子は
ブログにて公開中→



「教學一如」の碑



教えることは学ぶことである
学ぶことは
深く生きようと願うことである
その願いをこめ
子供らに幸あれと
ここに
教學一如の碑を建立する

表紙絵 鹿児島県総合教育センター 教職研修課 研究主事 福森 真一

発行元 鹿児島県総合教育センター
〒891-1393
鹿児島市宮之浦町 862 番地
電話 099-294-2311
FAX 099-294-2309
URL <http://www.edu.pref.kagoshima.jp>

教
學
一如

教えることは 学ぶことである
学び続ける教職員に

